様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ２１０１１

研究課題名（和文）中学生のいじめ認識の特徴とその深化に関する研究

研究課題名（英文）Characteristic of recognition regarding bullying among junior high school students

研究代表者
下田　芳幸（SHIMODA, YOSHIYUKI）

佐賀大学・学校教育学研究科・准教授

研究者番号：３０５１０３６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　中学生のいじめ認識の特徴を検討し、（１）自由記述では、具体的な行動レベルから抽象的な表現まで多様であること、（２）質問項目を用いた調査では、加害側が複数かどうか、あるいは継続的に攻撃を受けているかどうかより、被害側が反撃できるかどうか、がいじめかケンカなどそれ以外かの判断基準に大きく影響していることが示された。
　また、中学生のいじめ認識は実際の攻撃行動の実行頻度と関連しており、他者への攻撃をいじめと捉えやすい生徒は、実際の攻撃行動頻度が低かった。
　これらの特徴を踏まえ、具体的な行動に基づいたいじめ認識を深める心理教育を考案・実践したところ、中学生のいじめ認識が深まっている可能性が示された。

研究成果の概要（英文）：Study 1, quantitative text analysis revealed the diversity in junior high school students’ perceived behavioral indicators of bullying. Study 2, correspondence analysis showed that "fighting" and "crime" poisoned far from other categories respectively. The items about one-on-one troubles were collected around "fighting", and the items about troubles on the internet were gathered near "crime". Study 3, correspondence analysis indicated that only physical aggression with "plural member", "one-sided", and "repetition" was considered as "crime". The result also showed that "one-sided or not" is the only factor to separate "fighting" and "teasing" from "bullying". (other three studies were abbreviated)
Based on these studies, the author developed a training class to clarify the recognition of bullying and investigated its efficacy for junior high school students as a pilot study.

研究分野：臨床心理学

キーワード：中学生　いじめ　いじめ認識　テキスト分析　対応分析　心理教育

１．研究開始当初の背景

本研究は中学生のいじめ認識の特徴を明らかにすることと、その特徴を踏まえていじめ認識を深化させる心理教育を開発・実施することを目的としたものである。

いじめ問題の解決に際し、道徳教育をはじめとして、中学生のいじめ予防を図る取り組みは様々なものがなされている。それらが功を奏している側面もあることに異論はないが、いじめという言葉のイメージが漠然としており、中学生それぞれが思い浮かべる内容が不明確であること、抽象的なレベルにとどまることで具体的な行為、特に自分が普段行っている行為とのつながりを意識できていない事例が少なくないことが、筆者の学校臨床の経験やいじめ予防の取り組みの限界点などからうかがわれた。

そこで本研究では、いじめの定義が現行のものとなって以降の中学生のいじめ認識の実態を把握したり、そういったいじめ認識が実際の攻撃行動と関連するかどうかを検討すること、そしてこういった知見を踏まえて、中学生のいじめ認識を深める心理教育を開発・実践し、その効果を検討することで、中学生のいじめ予防や早期発見・早期解消に寄与する知見を提供することを目的とした。

２．研究の目的

本研究課題は、具体的に５つの研究から構成された。以降、研究成果の節までのカッコ内の番号は、同じ研究であることを示している（各番号は対応している）。

(1)いじめの定義は複数回の変更を経ているため、現時点でのいじめ認識の調査がまずは必要である。そこで、いじめの定義が現行のものとなった現在の中学生のいじめ認識を幅広く調査するため、自由記述によるアンケートを用い、中学生のいじめ認識の実態を把握する。

(2)中学生のいじめ認識の特徴を具体的に把握するため、先行研究を元に収集したいじめの可能性がある行動・トラブルに基づく質問項目を準備し、それぞれの項目をいじめと判断するか否か、といった観点から調査する。また、加害側が複数であること、行為が継続していること、被害者が反撃していること、の３側面を操作した調査項目を用いたアンケートも行い、中学生のいじめ認識に影響する状況要因の特徴も検討する。

(3)(2)で把握された中学生のいじめ認識の特徴の違いにより、実際の攻撃行動（身体的攻撃、心理的攻撃、関係性攻撃の３種類）の実行頻度との関連を調査することで、いじめ認識が実際の攻撃行動とどの程度関連するかを検討する。

(4)中学生のいじめ予防に際しては、その中心となる教員がいじめをどのように認識しているか、という観点も重要である。そこで、(1)・(2)と同様の調査を中学校教員にも行うことで、中学校教員のいじめ認識の特徴を検討する。

(5)(1)から(4)までの研究成果を踏まえて、中学生のいじめ認識を深める授業を開発・実施する。具体的には、班ごとの話し合いを中心に、いじめの可能性がある行為を複数取り上げ、それらについていじめか否かを話し合って決めるといった作業を通じて、人によって判断が違うことなど、そのため自分がいじめと思わないで行った行動も相手にとってはいじめの可能性があることなどに気づかせる内容である。その授業を実施し、授業後の感想文から、その効果について予備的に検討する。

３．研究の方法

(1)調査協力の得られた中学校に通う 1,389 名の生徒を対象とし、「いじめとふざけ・いじりやケンカとの違いは何だと思いますか」という問いに対して、自由記述による回答を求める形式でアンケートを実施した。アンケートは学級単位で一斉に実施し、その場で回収した。

得られたテキストデータに対して、計量テキスト分析を実施し、出現傾向の似通った語句をまとめた。

(2)１つめの調査では、調査協力の得られた中学校に通う 785 名の生徒を対象とし、いじめの可能性があるトラブルが書かれた３５項目について、ふざけ、ケンカ、いじめ、犯罪、分からない、のどれに当てはまるか、という形式での回答を求めた。アンケートは学級単位で一斉に実施し、その場で回収した。

類似の回答傾向を示す項目をまとめるために、得られたデータに対して対応分析を適用した。

２つめの調査では、調査協力の得られた中学校に通う 653 名の生徒を対象とした調査を行った。身体的攻撃と言語的攻撃を取り上げ、３つの状況要因（加害者が複数か単数か、攻撃が一方的か反撃もあるか、攻撃が毎日のように継続されているか単発か）を組み合わせた計１６項目について、ふざけ、ケンカ、いじめ、犯罪、分からない、のいずれに該当すると思うか、という形式で調査した。アンケートは学級単位で一斉に実施し、その場で回収した。

類似の回答傾向を示す項目をまとめるために、得られたデータに対して対応分析を適用した。

(3)調査協力の得られた中学校に通う生徒（調査 1 では 915 名、調査 2 では 446 名）を対

象に、いじめ認識を問う項目と攻撃行動に関する質問師からなる調査を行った。
　いじめ認識については、研究(2)で特にいじめか否かの判断が分かれやすかった項目５項目を用い、研究(2)と同様の形式で回答を求めた。類似の回答傾向を示す生徒をグルーピングするため、階層的クラスター分析を用いて、いじめ認識の傾向の違いから中学生を４タイプに分類した。
　そして、それぞれのタイプの違いで実際の攻撃行動の実行頻度に違いが見られるかどうか、分散分析で検討した。

(4)調査協力の得られた公立中学校に勤務する教師（調査 1 では 62 名、調査 2 では 51 名、調査 3 では 42 名）を対象に、研究(1)・(2)と同じ内容・形式の調査を行った。
　得られたデータに対して、研究(1)・(2)と同じの分析（計量テキスト分析、対応分析）を行った。

(5)対象となる中学生の感想を分析するため、研究(1)～(4)を踏まえて開発された心理教育を実施した中学校のうち、データ分析の許可が得られた 1 校の 1・3 年生 60 名の、授業後の自由記述の感想データに対し、計量テキスト分析を実施した。
　また、実施する側の教師の感想を分析するため、データ分析の許可が得られた中学校教師 31 名分の感想データに対しても、計量テキスト分析を実施した。

４．研究成果

(1)自由記述を用いたアンケートにより、「いじめ」という言葉で中学生が想起する内容は、具体的な行為や漠然としたもの、特定の攻撃行動を挙げる場合や雰囲気・当事者の関係性に言及するものまで、多様な内容で幅広いことが示された。
　この結果から、中学生のいじめ予防を図る授業に際しては、「いじめ」という用語を漠然と使用すると、授業の効果が薄まる可能性が示唆された。また、深刻な被害をもたらすいじめだけでなく、中学生が判断を迷うような行為を取り上げることが、中学生のいじめ認識を深める可能性がうかがわれた。

(2)いじめの可能性がある 35 の質問項目を用いたデータの分析結果から、ウェブ上のトラブルについては犯罪と認識されやすいこと、加害者が 1 人の場合や被害側が反撃できればいじめでなくケンカと認識されやすい傾向にあることが示された。また、いじめと犯罪の判断が分かれやすい項目が多いという結果も得られた。このことから、中学生のいじめ認識を把握する際に、こういった判断が分かれやすい項目を利用することの有用性が示唆される。
　次に、状況要因を操作した 16 項目を用いたデータの分析結果から、被害側も反撃できていれば、その攻撃行動が継続的であったり、加害者が複数であったりしても、いじめではなくケンカと認識されやすいという傾向にあることが示された。被害側が反撃できない状況というのは、いじめが深刻化しているケースも少なくないと想定されることから、被害側が反撃できてもいじめの場合があることなどを教えることが、いじめ予防教育において重要である可能性が考えられる。

(3)分析の結果、攻撃行動を「いじめ」と認識しやすい生徒は、実際の攻撃行動の実行頻度も低いことが示された。この結果から、中学生のいじめ認識を深めること、すなわち攻撃行動の多くについていじめの可能性を考えられるようになった生徒は実際のいじめを行いにくいことが考えられ、いじめ認識を深めることがいじめの予防（抑止）につながるものと思われる。

(4)調査 1 の結果から、中学校教師のいじめ認識に関わる要素として、被害者側の意識が重視される傾向がうかがわれた。これは、現在のいじめの定義にも合致する内容であり、中学校教師の間に、現在のいじめの定義が浸透していることが考えられる。一方で、以前のいじめ定義に含まれていた「一方的」「継続的」「立場の違い」を重視する回答も一部で見られた。このことは、現在のいじめ定義に合致しない古いいじめ認識をもっている中学校教師が、一部ではあるがいることを示唆している。中学校教師に対しても、現行のいじめ認識の定着を図る手立てが必要かもしれない。
　調査 2 の結果から、インターネット上のトラブルは犯罪と認識されやすいという、中学生と同様の傾向が示された。また、加害者が 1 人の項目はいじめでなくケンカと判断されやすいという結果も得られ、一対一で生じるいじめに関する理解を深める必要性も示唆された。
　調査 3 の結果から、調査 2 同様に一対一で行われるものはケンカと認識されやすい可能性が示された。先述の通り、一対一の生徒間で生起するいじめに関する理解が必要であろう。

(5)中学生の感想を分析したところ、今回開発した心理教育は、人によって受け止め方が違うことを知るきっかけになっていたようである。また、攻撃行動の多くがいじめでなく犯罪であるということを知ったインパクトは大きかったこともうかがわれ、本実践はいじめ認識を深めることに一定の効果があることが示唆された。
　授業を実施した教師の感想の分析した結果、本実践は教師にとっても発見があっ

たり、生徒がどのような思考プロセスでいじめか否かを判断したりしていることが分かってよかった、今後の指導に活かせそうな発見が多かったなど、概ね肯定的な評価であった。
　授業の改善点につながるものとしては、班ごとの話し合いを全体で共有し深めるためのステップが必要なこと、過去にあった案件に類似する内容に関する配慮などが挙げられていた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①下田芳幸、中学校でのいじめ認識を深める授業の予備的な効果検討、ストレスマネジメント研究、14 巻、2018、46-51
②下田芳幸、中学校教員のいじめ認識の特徴に関する研究、佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要、2 巻、2018、29-39
③下田芳幸、中学生のいじめ認識傾向と攻撃行動との関連性、佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要、2 巻、2018、21-28
④下田芳幸、中学生のいじめ認識に関する研究(2)―行為内容の分類および形態の違いの観点から―、佐賀大学教育学部研究論文集、2 巻 1 号、2017、269-276
⑤下田芳幸、中学生のいじめ認識に関する研究(1)―自由記述の分析による検討―、佐賀大学教育学部研究論文集、2 巻 1 号、2017、259-268

〔学会発表〕（計１件）
①下田芳幸、中学生のいじめの判断傾向と攻撃行動との関連、日本心理臨床学会第 36 回大会、2017、パシフィコ横浜（東洋大学）

〔図書〕（計１件）
①竜田徹・林裕子（編著）、教師へのとびら―継続・育成型高大接続カリキュラムの開発と展開―、佐賀大学教育学部（分担執筆）、135-142

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　下田　芳幸（SHIMODA, Yoshiyuki）
　佐賀大学・大学院学校教育学研究科・准教授
　研究者番号：３０５１０３６７

(2)研究分担者
　なし　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　なし　（　　）

　研究者番号：

(4)研究協力者
　なし　（　　）